

地域住民と施設、お互いが必要とされる関係性の構築

——認知症と朝市と地域住民——

城丸聖平，和泉安津砂

社会福祉法人守里会

【目的】 ケアにおいて重要なのは、共に生活する中で認知症の方の持っている力を実感することである。それは、生活を支援する上で机上で学ぶよりも重要なことである。

そこで、認知症の方が地域と関わりながら力を発揮し要介護度が改善された事例を通し、共に生活する者同士が必要とされる関係性を築くには何が必要か、またそこからの相乗効果を朝市や地域食堂を通して検証する。

【方法】 認知症の方や地域住民が運営主体となっている朝市・地域食堂において、地域住民と認知症の方との関わりや、自然なやり取りを大切に利用者への介護度改善、地域住民の活性化に繋げていく。

事例 男性 要介護度3 若年認知症
 男性 要介護度5 アルツハイマー型認知症
 女性 要介護度3 アルツハイマー型認知症
 男性 地域住民 生きがいなく意欲低下

【倫理的配慮】 発表にあたり利用者・家族及び地域住民、管理者への承諾を得た。また、個人情報・秘密保持について配慮を行った。

【結果】

- ・認知症の方、一人ひとり自分の場ができたとき、認知症の方が全員元気になる。
- ・指示により動かされたのでは、真の笑顔・元気は取り戻せない。
- ・施設と関わることで地域も元気になる
 - 男性 要介護度3 → 要介護度1
 - 男性 要介護度5 → 要介護度3
 - 女性 要介護度3 → 要介護度1
 - 男性 意欲低下 → 意欲向上

【考察】

- ・認知症の方の自分の場を作るために、一人だけをみてケアを行うのでは、十分な成果はでない。全員をみながら一人をみていく、一人をみながら全員を見ていくことが大切である。
- ・認知症の方が認知症の方に指示をするなど、誰の指示であってもそれにより動かされたのでは、十分な成果を得ることができなくなる。
- ・直接介護保険サービスを受けなくても自分の役割や目標が出来ることで生活を営むことが出来る。